

आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市横島町千足80

図書館のおかげです。

京都文教大学・京都文教短期大学図書館長
総合社会学部・教授(社会学、大衆文化論) 鵜飼正樹

仕事から、図書館にはよくお世話になる。京都文教大学の図書館はもちろんのこと、他大学の図書館、公立の図書館、特定の専門分野が充実している専門図書館など、あちこちの図書館にお世話になっている。

お世話になるといっても、蔵書を借りて読むことは少ない。本、新聞、雑誌などの資料を探索して、研究テーマに関連する記述やデータを見つけるとは、必要箇所をコピーしたり、筆記したりという、きわめて地味な作業がもっぱらだ。

とくに私は、大正から昭和にかけての新聞、雑誌資料を探索することが多い。こうした資料の多くは未整理で、データベース化はおろか、索引なども作成されていないから、とりあえず記述が出てきそうな対象と期間をしぼって、徹底的に見ていくしかない。

けれども、その対象や期間が事前にはっきりしていることは少ない。したがって、膨大な資料を延々と見続けなければならないことも多いのである。

たとえば、私が毎年学生を連れて調査に行っている富山県の「つくりもんまつり」は、いつごろから現在のように観光客が押し寄せる人気の祭りになったのか。それを調べるために、富山県立図書館に行く。町史の「民俗」や「観光」に関するページを繰ってみるが、思わしい結果はえられない。ではどうするか。地元の新聞でどのように取りあげられているのかを、何十年にもわたって調べてみるのである。

「つくりもんまつり」がおこなわれるのは、毎年9月23～24日と決まっている。だとすると、地元の新聞の縮刷版やマイクロフィルムの「9月」を閲覧して、9月20日ごろからの記事を、目を皿のようにして探すしかない。とりあえず、昭和の終わりからさかのぼって、マイクロフィルムを見ることにする。

こうして、「つくりもんまつり」の前身が「観

光地蔵まつり」という名であったことがわかり、昭和40(1965)年9月25日付『富山新聞』の記事に「第五回福岡町観光地蔵まつり」と書かれていることを発見して、指折り数えながら、「ということは、昭和36年に第1回が開かれたわけで、日本の高度経済成長が始まるのとほぼ同時期に、観光客を意識した祭りになっていったのだな」と納得する。

そこで、念のために昭和36年の紙面を調べてみるが、「第一回観光地蔵まつりが盛大にひらかれ、多くの観光客がつめかけた」などといった記事は、残念ながら、みつからなかった。だからといって失望する必要はない。当初はそれほど注目されていなかったということも、それはそれで重要なことである。

新聞や雑誌は「鮮度が命」だ。古くなれば価値はなくなって、処分されてしまう。昨日の新聞なんか、大事に残す人はいないだろう。けれども、そうした新聞や雑誌を図書館が保存してくれているからこそ、過去の事実を掘りおこし、その時代の空気にまでせまることができる。捨てられてしまうような資料を残しておいてくれる図書館があるおかげで、私の研究はなりたっているのだ。

以上、サラッと書いてはいるが、始発の北陸線特急と北陸新幹線を乗り継ぎ、富山県立図書館に足を運び、午後7時の閉館時間ギリギリまで粘って、マイクロフィルムを集中して見るという、気力、体力、視力を限界まで消耗するような作業を続けて、ようやくつきとめたことなのである。そして、その日のうちに京都に戻るために、富山のキトキトの魚も食わず、地酒も飲まず、クタクタになって、帰宅したのである。

まあ、まる1日かけて、精も根もつきはてるまで調べてわかったのは、たったそれだけのことか、といわれれば、そのとおりなのだけれど、それでも、その疲れは、どこかすがすがしくあったりもする。(うかい まさき)

🌸🌸🌸 ことばが伝わるといふこと 🌸🌸🌸

ライフデザイン学科・教授（日本語学、コミュニケーション学） 森 川 知 史

「ことばが伝わらなくなった」と言う人がいる。ことばが伝わらないことがない、とは言えないから、それは本当なのかもしれない。だが、多くの場合「ことばが伝わらなくなった」のではなく、元から伝わっていなかった自分のことばに、いまようやく気付いたのだ。

少し考えてみれば、分かるはずだ。ことばなんて、そう簡単には伝わらない。あんな曖昧で、断片的で、適当な表現で、異質な他者に、どうして伝わるといふのか。

「いま初めて、ことばが伝わったように思う」と言う人がいる。それは、伝わらないことばに悩んだあげくのことだ。ことばが、そう簡単には伝わらないことに気付いてようやく、人は自身のことばを見つめるようになり、相手のことばと真剣に向き合うようになる。それでも、そう簡単にはことばは、やはり伝わらない。自身のことばを問い直し、相手との向き合い方を見つめ直し、何とか伝えたい、聞きとりたいと切実に願うようになって、ようやく、ほんの少し何かが伝わり合ったような心持が訪れる。

コミュニケーションは、それにつまずかないうちは伝わっているつもりで済んでいる。だが、コミュニケーションはそれにつまずかないかぎり、その本当の働きやダイナミズムや出会いをもたらすそのパワーに、なかなか気づけないものだ。

自分と同質だと思う人たちの中に埋没して安心感を抱いている人たちがいる。結局のところ、同じ人間なのだから、根本的なところはさほど違わない、などと安易な決めつけに安住して自身を深く見つめようとしなさい。そんな人たちが群れをなして、異質な人の侵入をいやがり、少しでも異質なものを嗅ぎつけると、その群れから排除しようとする。「空気がよめない」といふことばは、そういうときに使われる。

そんな群れの中で行われるコミュニケーションは、一見、ことばが交わされているようにみえても、それは総てが「ひとりごと」だ。それらのことばは、絡まず、重ならず、関係しない。どこまでも、個人的感想だけが曖昧なまま断片的に、そ

して独善的に投げ出される。ことばが選ばれても、それは違和を群れの中に生じさせないように気づかって選ばれるばかりで、群れに波紋を生じするような表現は、極力回避されることになる。

差し出されることばが、誰かを考えさせ、迷わせ、戸惑わせ、結果としてその人物の内面変化をもたらす、などということがあってはならない。異質さは、その群れでは最も毛嫌いされることだから、異質なことばも、表現も、内容も、差し出されてはならないのだ。だから、群れの中で交互に繰り出されることばは、同質の者たちが違和感なく受けとれるものばかりで、誰もが口をそろえて「そうそう、分かる分かる」と繰り返すことになる。「～だよねえ」「～じゃない」というようなやりとりの中で、少しでも異質さを感じることばに出会うと「それ違うんじゃない」と指摘され、少しでも早く訂正しなければ異質物として排除されるかもしれない。

この群れでは「察する」ことが求められる。曖昧なことばを放り出し、語尾を濁らせ、「ほら、分かるでしょ？」と、もたれかかる。あるいは、ことばを発しないまま、「雰囲気だけで気付け」と要求する。

この群れに身を置くことは一見、楽そうにみえる。みんなが同質で「仲間なのだ」と思っていられれば安心だ。だが、ほんの少しでも群れから異質さを嗅ぎとられたら途端に排除されるだろうから、群れの空気をいつもよみながら、ずれを起こさないように気を配っていなければならないし、曖昧な表現や雰囲気を探る必要もあるので、なかなか精神が安らがない。群れのボスやその周辺は「ほら、分かるだろう」とか「鈍いんじゃないか」などと勝手気ままだから、この群れでの序列が上がるまでは、何とか排除されないように神経を張りつめている必要があるのだ。

人間はどんなに頑張っても、元来ひとりひとり個別の存在であって、決して同質にはなれない。オギャアと生まれ落ちた瞬間から、肉体的にも能力的にもひとりひとり異なっている。たとえそうであっても、いや、だからこそ、私たちは孤立を

恐れ、強い仲間意識を渴望するのかもしれない。

本当に強い絆で結ばれた人間関係を望むなら、最初から安易な仲間意識にしがみついてはいけないのだ。まずは、自分と他者の違いについてしっかりと認識する必要がある。互いに察し察されることに依存せず、自分とは異なる「多くの」他者を発見し、他者のことばに熱心に耳を傾け、その

人の中の異質な部分を見出し、それを理解するために質問を重ねる。そして、その結果としてみえてくる自分と同質の根元的なものが理解されたとき、本当の仲間がそこにいることに気付くだろう。そして、そこにもうひとつ、いままで以上に確信のもてる自分自身の姿がみえるようになってくるはずだ。(もりかわ としふみ)

Withの力と情報について思うこと

非常勤講師(元臨床心理学部・教授(人権、教育)) 竹口 等

私は、退職にあたっての最終講義で「Withの力」と題して、人間が生きていく上で、5W1Hという主体的営みとその営みにボディブローのように影響を与える自己以外の客体的存在との相関性をもう一つの「W」＝「Withの力」として考察してきたことを話させていただいた。

経済的貧困や差別によって、不利益を受けている子どもたちを核とした「家庭」・「学校」・「地域」という3つWithの力の輪に行政の「With」が重なるなかで、課題を克服し、連鎖を断ち切ることができる可能性が見えてきていることについて触れた。また、Withの力＝資本・資源としてとらえた場合、①経済資本(経済力、収入、物的資産などの資源)、②文化資本(教養・学歴・習慣などの資源)③社会関係資本(人間関係のネットワーク資源、「つながり力」)があり、これらの資源への支援(「With」のスクラム)の在り方についても少し話をさせていただいた。

私自身の生育でのこれらのラッキーな力を振り返らせていただいたが、改めてそのWithの力の中核にあった力のひとつが「情報」ではなかったかと、思い起こしている。自分の生活経験やトリートリー内の情報だけでなく、それらを飛び越えた、違う角度や高さからの新鮮な情報が、私を未知の世界と夢に導いてくれた原動力になったのではないかと思う。学習はある意味で知識という情報の蓄積と活用であるといえる。中学高校時代の私のノートは、大学生の話にヒントを得て、見開きの半面しか記入せず、反対側の半面は自由記述スペースのような空白で、教師の脱線談や質問メモなどの情報を記入していた。案外この落書き的メモ情報がテストや教師との人間関係に役立った。

大学でもこのような方法を活用して、試験前には整理したノートを、コピーのない時代であったので、大学前の文具店に持ち込んで、試験対策用講義ノートとして採用してもらい、結構いいバイト代を稼いだ。しかし、これらの情報は授業や講義という一定のまとまりのあるパックでしかなく、他の講義や社会の諸情報・文献との連動性、とりわけ手帳に記した諸情報との連関から見れば極めて窮屈感が否めなかった。

このような思いに駆られていた時に、出会った本が「梅棹忠夫著『知的生産の技術』」(岩波新書)であった。目からウロコという衝撃で、知的な情報等を柔軟に活用出来る「京大式カード」なるものを知り、当初は市販のものを使って、貯まったカードを並べ替えたりして新鮮な学びを体感していた。ところがしばらくすると、市販カードの紙の厚さや罫線の在り方(何よりも価格)に不満を感じ、独自性を加味した「竹口専用カード」を別途経済効果も狙って大量発注する具合となった。今そのカードは、研究室にある10台のカードロッカーに収まっている。

その後コピー機が普及し、PCの発展により、情報の質・量、スピードは激変した。その中で、情報リテラシーが喫緊の課題となっている。「情報は真実の一端に過ぎない」されど「情報は、経済資本・文化資本・社会関係資本を振動させる力でもある」。情報をどのように入手し、精査検証し、活用していけるかが、人権・教育を担う組織や機関にとって重要な課題と考える。情報は教育的不利益を強いられている人間にとって、人生を克服していくための重要資源であることをも忘れてはならない。(たけぐち ひとし)

🍓🍓🍓 私のすすめる3冊(私の推薦図書) 🍓🍓🍓

幼児教育学科・准教授(教育工学、教育コミュニケーション学) 真下知子

『言語の社会心理学－伝えたいことは伝わるのか－』

岡本真一郎 著／中公新書 2013

「わたしの孫はおじいさんですよ」

「わたしの孫はおばあさんですよ」

この会話は、誰がどこで何のことを話しているのかわかりますか？

これは、孫を同じ幼稚園に通わせている人たちが、発表会の劇での配役について話している会話なのです。このように、聞き手と話し手がお互いに共有している情報があれば、一見不自然に思える会話でも問題なく意思疎通することができます。逆にそれがなければ、一生懸命、丁寧に話しているのに伝わらないこともあるのです。本書は多くの事例を通して言葉によるコミュニケーションを再考させてくれる一冊です。

『みんなでつくる1本の辞書』

飯田朝子 著／福音館書店 2015

著者は、ある日留学生に「どうして、にんじんも、電車も、柔道の勝負も「1本」と数えるの？」と質問され、返事に困ります。そこで「1本」と数えるモノ・コトを集めて「1本の辞書」が作られました。私たち日本語を話す人が「1本」と数えるときに思い描くイメージとは？

本書はユニークなイラストとともに、私たちが日頃使っている言葉と思考、文化について考えさせてくれる一冊です。

『人工知能と友だちになれる？』

－もし、隣の席の子がロボットだったら…マンガでわかるAIと生きる未来－』

新井紀子 監修／誠文堂新光社 2018

私たちが望むかどうかは別にして、生活の中に入ってくる人工知能。人工知能によって私たちのコミュニケーション、学び、仕事の形はどのように変化し、どのような社会になっていくのでしょうか？そして、これからの未来を生きていく子どもたちは、どのような力を身に付けていくべきなのでしょう？親しみやすいマンガを通じて考えてみましょう。

(ましも ともこ)